

初年次教育学会

ニュースレター 第14号

Japanese Association of First Year Experience
at Universities and Colleges

初年次教育学会 事務局分室

〒162-0801

東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

TEL: 03(6824)9372 FAX: 03(5227)8631

E-mail: jafye-office@bunken.co.jp

事務局

明星大学 菊地 滋夫研究室内

今号の内容

1. ご挨拶
2. 事務局からのお知らせ
3. 学会誌編集委員会からのお知らせ
4. 大会運営委員会からのお知らせ

5. 初年次教育実践交流会の報告
6. 課題研究活動委員会からのお知らせ：第15回大会課題研究の登壇者募集について
7. 「2021年度教育実践賞」審査結果報告
8. 編集担当より

1. ご挨拶

会長 藤田 哲也（法政大学）

2020年度～2021年度の2年間は、新型コロナウイルスの影響によって、「大学教育の本来の在り方」と向かい合わざるを得ない日々が続きました。本学会にもっとも関連した、初年次教育を初めとした授業をどのように行うのか・行えるのかという悩ましい問題はもちろんのこと、学生たちが主体的に行ってきた課外活動の支援の在り方、はたまた入試の実施方法など、「当然のごとく眼前にあったもの」の多くについて、これまでとは異なる対応をしなくてはならなくなったことは、すべての会員の皆様が経験されたことと思います。2020年の4月の時点では「どうしていいやら、さっぱり見通しが立たないぞ」という不安と困惑しかなかったのに、2年経過した現在では「どうにかこうにか、やっていけそうだ」という自己効力感を持つに至っていることもまた、皆様共通の体験ではないかなと思っています。

学会誌第14巻第1号の巻頭言でも述べていることですが、我々は少なくともそれなりに、こうした「想定していなかった事態に対処する力」を持っていることに自信を持ってよいと思います。同時に、学生たちにもこの2年間の経験を、前向きに、学生たち自身の今後の人生に活かすように促す役目を我々が担っているという発想を持つことも重要かと思っています。

「学会」という組織は、単に学術的な知見を集約・統合して配信するだけのものではなくて、やはり「同じ志を持っている者たちのコミュニティ」としての機能を果たしてこそ、存在意義があるのだと、この2年間に強く感じまし

た。まだまだ教学上、そして大学運営上の苦勞も尽きないとは思いますが、我々には幸いにしてその苦勞の本質を理解し合い、励まし合い、実践知を共有し合うことができる「仲間」がいる…そのように考えられるでしょう。この難局を、必ずしもベストとはいかないまでも、ベターな方策で乗り切っていくために、本学会が皆様のお役に立てることを目指し、今後も精力的に活動を展開していきたいと考えています。皆様もコミュニティの一員として、積極的に交流していただければ幸いです。

2. 事務局からのお知らせ

事務局長 菊地 滋夫（明星大学）

いつもお世話になっております。事務局長の菊地滋夫（明星大学）です。

(1) 2022年度年会費納入のお願い

お手元に2022年度年会費納入のための振替用紙が届いているかと思います。5月31日までに納めていただければ幸いです。

(2) マイページ活用のお願い

2016年度からマイページの運用が始まっています。マイページには学会ホームページよりお入りいただけます。マイページからは、会員情報（所属等）の変更が行えます。4月以降、異動される方、メールアドレスを変更される方などは、ご自身で登録情報を変更することができます。年会費の納入状況もご確認いただけますので、ぜひご活用く

ださい。

ログインに必要な「会員番号」と「パスワード」は、2015年度に会員だった方には2016年3月16日頃に、2016年度以降に入会された方には入会時にお送りしたメールに記載されています。今後も必要となりますので、お手元にお控えください。

(3) 学会誌バックナンバーのPDF公開について

本年5月頃より、学会誌バックナンバーをPDF化して学会ホームページにて広く公開すべく準備を進めております。PDF化につきましては、すでに総会にて承認・周知されておりますが、何らかの事情で、ご自分の論文等をWebで公開できない場合は、事務局までご一報ください。

3. 学会誌編集委員会からのお知らせ

編集委員長 田中 岳（岡山大学）

初年次教育学会誌第14巻第1号をお届けいたします。本ニュースレターと相前後して皆様のお手元に届くことになるかと存じます。投稿論文は、計3件でした。査読の結果、事例研究2件を採録できました。昨年4月下旬、3度目の緊急事態宣言が4都府県に発令、5月末という本学会への投稿期日は、9都道府県に対して緊急事態宣言が延長された最中でした。そのようななか、本学会へ投稿いただいた（また投稿を検討くださった）会員の皆さんにお礼を申し上げます。また本号では、第14回となる学会大会（オンライン）で開催された、ふたつの課題研究シンポジウムの内容を掲載しております。御一読ください。次号においても、会員の皆様からの積極的な投稿をお願い申し上げます。

次号は第15巻第1号となります。原稿募集の概略をお知らせします。

(1) 次号の発行時期

2023年3月に第15巻第1号の発行を予定しています。

(2) 原稿投稿の期限

第15巻の投稿締め切りは2022年5月末日です。学会誌の編集規程及び執筆要領に従っていない場合は、投稿論文を受領することができません。そのような理由で返戻された論文を修正した上で再投稿する場合の期限も5月末日となります。提出期限間に投稿された論文については、規程・要領に従っているか否かの確認が期限後となり、結果的に査読対象から外れることがあり得ます。執筆用のテン

プレート利用を厳守くださり、特に図表については該当箇所を本文中に示すだけとして、図・表いずれもテンプレート末尾のページに掲載することになりますので、執筆を検討・開始する会員におかれては改めて御注意ください。

(3) 原稿の執筆、投稿、その他

初年次教育学会のウェブサイトに掲載している「初年次教育学会誌執筆要領」「論文執筆用のテンプレート」「カバーレーター用テンプレート」を御参照ください。指定した書式通りでない原稿は、受け付けることができませんので御注意ください。

<http://www.jafve.org/society/regulations/shippitsuyorvo/>

また執筆及び投稿にあたっては、事前に「初年次教育学会倫理綱領」の精読をお願い申し上げます。

<http://www.jafve.org/wp-content/uploads/kaisoku190907.pdf>

(4) 投稿論文の提出先

初年次教育学会ウェブサイト「学会誌」のタグにある「電子投稿システム」からお手続きください。

<https://iap-jp.org/jafve/post/Login>

(5) 投稿資格および1巻あたりの投稿数

本誌に論文を投稿することができる者は、共同執筆者を含め、前年度までに入会し3月末までに会費を納入している個人会員及び機関会員に限られます。また、1巻あたりに投稿できる論文の数にも定めがあります。詳細は、初年次教育学会誌編集規程第9条を御確認ください。より多くの会員の皆様から、充実した研究論文及び事例研究論文の投稿をお待ちしております。

<http://www.jafve.org/society/regulations/henshukitei/>

4. 大会運営委員会からのお知らせ

大会運営委員会委員長 藤波 潔（沖縄国際大学）

2021年度の第14回大会は、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえて、オンライン形式での開催となりました。学会としても初めての開催形式であり、準備段階からさまざまな問題もありましたが、藤田大会運営委員会前委員長（現在は本学会会長）のご尽力、サポートデスクの献身的なご支援、そして、何よりもシンポジウム登壇者、自由研究発表者、ワークショップやラウンドテーブルの企画者・参加者の皆さまの甚大なるご協力を得て、無事に終えることができました。関係された皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

ご挨拶が遅くなりましたが、第14回大会終了後に大会運営委員長を拝命いたしました、沖縄国際大学の藤波と申します。会員の皆様にとって初年次教育に関する研究や実践の成果を発表し、最新の知見を得、会員相互の交流の機会となり、当学会の中心的な事業でもある研究大会の運営について、力不足ではありますが精一杯努める所存です。会員の皆様のご協力を賜りますよう、お願い致します。

さて、2022年度の第15回大会ですが、2022年9月5日(月)、6日(火)の日程で、多摩大学を会場として、3年ぶりの対面実施として開催すべく現在準備を進めております。内容については、ワークショップ、ラウンドテーブル、大会校企画シンポジウム、課題研究シンポジウム、および自由研究発表を予定しております。なお、飲食を伴う情報交換会の開催は困難ですが、会員の皆さまが自由に交流できる場は設定したいと考えております。自由研究の発表や大会参加についての情報につきましては、4月以降に学会Webサイトで順次ご案内いたしますので、ご確認ください。

なお、できうる限り対面での開催を模索して参りますが、新型コロナウイルスの感染状況や自然災害等のやむを得ない事情により、大会開催の形式が変更になる場合もありますことを、あらかじめご承知おきください。また、対面での大会に参加ご予定だった方が、さまざまなご事情によって急遽参加できなくなる場合も想定されます。このため、シンポジウム等の一部の内容については、大会終了後に動画配信できるように準備したいと考えております。

いずれにしても、状況は刻々と変化しますため、学会Webサイトで最新の情報をご確認くださいようお願い致します。

5. 初年次教育実践交流会の報告

地域活動活性化委員会委員長 成田 秀夫 (大正大学)

今年度は、以下に概要を示したように、初年次教育実践交流会を北陸実施しました。また、協同教育研究会のオンライン研究会を初年次教育学会の実践交流会として解放していただきました。開催に向けご尽力いただきました皆さまに心よりお礼申し上げます。

本学会では、地域での活動を活性化するために、地域の実情や参加者の要望に応じた実践交流会の開催を応援しています。参加者も会員に限定する必要はありません。企画内容は、初年次教育に関係していれば幅広く柔軟に考えていただいて構いません。ただし、単なる講演会のご遠慮ください。あくまでも初年次教育の一環として実施してい

る授業や取組などに直接関与している皆さまの報告や話題提供、および意見交換を趣旨としています。

実践交流会を開催したいと考えている方は、学会事務局までご一報ください。「地域活動活性化委員会」がお手伝いいたします。

(1) 初年次教育実践交流会 in 北陸

日時：2021年10月23日(土) 13:00~16:00

会場：しいのき迎賓館ガーデンルーム

形式：対面・遠隔同時開催

テーマ：コロナ禍における「学生中心の授業」を考える
—初年次教育の課題と展望—

参加者：48名

今年で6度目の開催となる北陸では、初めてハイブリッド方式による交流会を開きました。コロナ禍の遠隔授業では補いきれない対面授業の大切さと効果を改めて確認した教育実践例を4大学に報告いただきました。パネルディスカッションでは、「コミュニケーション」をキーワードに、初年次学生に対する遠隔授業のメリット・デメリットについて共有するとともに、初年次学生を自律した学修者へ導くための方策を議論いたしました。プログラムは以下の通りです。

開催趣旨の説明 垣花 渉 (石川県立看護大学)

第1部 実践事例報告

① 垣花 渉 (石川県立看護大学)

実技科目の魅力再認識—自己を表現・発見すること—

② 小椋 賢治 (石川県立大学生物資源環境学部)

オンラインオンライン授業における双方向コミュニケーション

③ 堀井 祐介 (金沢大学教学マネジメントセンター)

金沢大学全体での取組—オンデマンド・ハイブリッドへの切り替え

④ 西村 秀雄 (金沢工業大学基礎教育部)

コミュニケーション改善のための授業内LMS活用—初年次教育への応用可能性—

第2部 パネルディスカッション

コロナ禍における初年次教育アクティブラーニングの成果と課題

コーディネーター：藤本 元啓 (崇城大学総合教育センター)

パネラー：垣花 渉、小椋 賢治、堀井 祐介、

西村 秀雄

(2) 第 53 回『協同教育研究会』初年次教育実践交流

日 時：2021 年 12 月 4 日（土）14:00～17:00

方 法：Zoom によるオンライン開催

参加者：45 名

概 要：下記の内容で協同教育研究会を開催しました。
オンラインで開催したので、北海道から沖縄まで、全国各地からの参加がありました。

(i) 挨拶・導入 安永 悟（久留米大学）

① 挨拶

② zoom の「ブレイクアウトルーム」を用いた仲間づくり（自己紹介）

③ 協同学習の基礎基本の確認

(ii) 研修「わかる力を育てるための要約・作文トレーニング」

担当：坂東実子（敬愛大学非常勤講師・明治大学兼任講師・東京学芸大学附属国際中等教育学校非常勤講師）

内容：「○文字以上で書け」という課題の弊害か、文字数をみやすために冗長な文章を書く学生が多い。要約練習は、「わかる力（読む力）」「わかりやすく伝える力（書く力）」を育む。今回はそのトレーニングの紹介と、さらに、わかったことを自分の体験・知識に結び付け、新たな問題意識を提示してまとめる 400 字作文を書くということを通して、課題文の知識が自分の中に定着しそれをもとに考えを展開することを楽しむ体験を行った。

(iii) 何でも相談会

担当：須藤 文（久留米大学）

内容：参加者の皆さんの交流を兼ねて、協同教育に関する「お悩み」を共有する時間を設けた。

6. 課題研究活動委員会からのお知らせ：第 15 回大会課題研究の登壇者募集について

課題研究活動委員会委員長 濱名 篤（関西国際大学）

本年度の課題研究は新しい試みとして、課題研究委員会で選定した下記の課題について、会員から自薦での登壇者の公募を行います。皆さんにとって関心が高い課題について、研究実績や教育実践をお持ちの方を選定して、学会活動を活性化していきたいと思っています。多くの会員の応募を期待しています。

課題研究のテーマ：

「ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育」

(1) 問題の所在と背景

新型コロナウイルス感染症（以下 COVID-19）が世界中で拡大し、WHO（世界保健機関）が 2020 年 3 月 11 日に世界的流行としてパンデミック状態であることを宣言して以来、世界は COVID-19 の影響を受け続けている。この間ワクチンが開発され、学校・高等教育も従来のオンライン授業一辺倒から対面授業へと戻りつつあるが、新たな COVID-19 の株が出現し、更なる感染が世界中で広がるなど COVID-19 がいつ収束へと向かうのかを予想することはむずかしい。

人類はウィズコロナを前提とし、ポストコロナの生活を考えていくことが求められているといえる。経済活動への影響はもとより、高等教育機関へのこの未曾有のコロナパンデミックの影響は甚大かつ計り知れない。とりわけ、コロナ世代と呼ばれる 2022 年度に 3 年生になる世代は、入学時からオンライン授業が標準的な授業形態でもあり、かつ部活動や正課外での活動も極めて経験することが限られていたといえる。先日公表された 2021 年度大学生協調査においては、コロナ禍における大学生が不安を抱えている状況が明らかになった。

学生生活充実度について、前年からは回復したが、2 年生が低く、平均登校日数はコロナ禍以前の 64%程度となっている。サークル加入率は低く、4 人に 1 人が入っていないし、今後も入ることがないと回答している。とりわけ、2 年生の 25%が人間関係に悩んでいるという回答が見られる。といったことが本調査結果の概要として示されている。

従来、初年次教育は、高校から大学への円滑な移行を支援するための教育として、学業面での移行のみならず、新入生の自己肯定感を向上させ、大学というコミュニティへの帰属意識を持たせることで、人間関係を円滑化することをも目的とし、実際に寄与してきた。それゆえ、初年次教育がほとんどの高等教育機関において、普及し、プログラムとして構築されてきた理由でもあった。

しかし、COVID-19 の拡大による状況において、従来対面型でこうした機能を充実させ、貢献してきた初年次教育が、果たしてオンラインが中心となる状況において、どれだけこうした機能を果たし、新入生を導いているかについての研究やグッドプラクティスの蓄積もほとんどみられない。また、オンラインテクノロジーや DX の発達によりこうした初年次教育の機能をどれだけ果たしているかと

いうデータも提示されていない。

ポストコロナにおいて、従来通りに大学の姿に戻るとは予想できないとすれば、現在のウィズコロナの状況において、初年次教育が、いかに新生の自己肯定感を支え、心理的安定に寄与し、将来への確実なプランを立てるかなど、今後の新生が充実した大学生活を送るうえでの鍵となると思われる。

そこで、グッドプラクティスだけでなく、研究としての蓄積にもなるような内容を深めていくことを目的として、課題研究グループでは、2年間にわたって、このテーマを扱い、学会としてこの課題に取り組むことにした。

今後の学会活動を担っていく人材を発掘するというところに鑑みて、本テーマやサブテーマに関連して研究を行っている、あるいは実践を行っている話題提供者を公募するという形で発掘することにした。

なお、大テーマは、ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育であるが、サブテーマとして以下の4つを立てている。サブテーマは必ずしも1つのみではなく、複数にまたがる場合も可とし、発表には、事例（実践）に分析的な観点も含まれていることを要件とした。

サブテーマ

- (1) 自己効力感、自己肯定感、心理的安全性、帰属意識（所属感）
- (2) DX・オンラインとリアルな体験、グループワーク
- (3) キャリアプラン、ライフキャリア
- (4) 入学前教育
- (5) 教育過程や学修成果の分析や評価の方法

(2) 選考の方法・スケジュール

この選考にあたっては、皆さまのこの2年余のコロナ禍のもとでの初年次教育を実践されてきた経験を通じての好実践や研究成果から、これからの初年次教育や大学教育の在り方を考えつつ、課題発見から課題解決につなげることをめざし、今年度と次年度の2年間を通してこの課題をとりあげていきます。

課題意識の明確性、実践実績または分析の説得力、発展性、汎用性、などの観点から審査いたします。

募集人員：3名程度

(i) 書類選考

800字程度に、研究報告の概要についてまとめてもらう。①タイトル、②サブテーマのいずれに該当するか（複数可）、③報告内容（内容、方法）、④氏名、

所属を記載

送付先：学会事務局 jafve-office@bunken.co.jp

締め切り：4月18日17時

(ii) 審査委員会で書類選考通過者に面談（Zoom）

4月24～29日頃を予定

(iii) 課題研究活動委員会で選考

結果決定・通知：4月末頃を目途

登壇者の審査・調整を行い、サブテーマ、登壇者確定

(iv) 登壇者打合せ：5月中旬以降を予定

(3) 審査担当者

課題研究活動委員会：濱名 篤、山田 礼子、森 朋子、山田 剛史

7. 「2021年度教育実践賞」審査結果報告

審査委員長 成田 秀夫（大正大学）

早春の候、会員のみなさまにおかれましては、新年度を迎えますますご盛栄のこととお慶び申し上げます。平素より学会の運営にご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、この度、学会ホームページでお知らせしておりましたように、「2021年度教育実践賞」につきまして、会員投票と審査委員会で審査が終了しましたので、結果のご報告をいたします。

2021年度の教育実践賞には8つの応募があり、審査委員会が、独創性、適切性、有効性、汎用性、有用性の5つの観点から構成されるルーブリック（応募要領で公表）に基づいて審査を行い、以下の4つの取組が1次審査を通過しました。

学会ホームページにてプレゼン動画・資料を公開した後、会員投票と審査委員の評価を行いました。

No.	申請者／所属大学	取組み名称
1	西谷 尚徳 立正大学	専門学修への移行としての官学連携事業「協働型模擬選挙」の実践
2	光成 研一郎 神戸常盤大学・ 神戸常盤大学短期 大学部	チームで学ぶ【入学前教育×初年次教育によるシナジープログラム】の構築 ～入学前から初年次を貫く“まなびのプラットフォーム”～
3	関田 一彦 創価大学	「学術文章作法Ⅰ」を中心とした文章力向上プログラム
4	廣瀬 清英 岩手医科大学	多職種連携のためのアカデミックリタラシー ～PBL ワークショップ「信頼される医療-チーム医療-」(2021年度型)～

会員の投票を踏まえ、審査委員会で検討したところ、2つの取組への投票数が僅差であったこと、また、今回はコロナ禍の影響もあり、オンラインでの投票数が少なかったことを踏まえ、次のように表彰することといたします。

優秀賞	光成 研一郎／神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部
優秀賞	関田 一彦／創価大学

受賞されたみなさま、おめでとうございます。次回大会での表彰式、及び、学会誌での審査報告に先立ち、1次審査を通過された4つの取組について、審査委員のコメントを踏まえ、前頁の表で各取組に付した番号順に簡単に講評を述べさせていただきます。

No.	講評
1	市民教育や政治リテラシーの育成を目的とする PBL であり、有用性の高い取組である。ただし、法学部カリキュラムではなく、1ゼミのみで実施されている点、1年生のゼミ「基礎演習」と連動が薄い点など、初年次教育として展開が乏しいのが惜まれる。興味深い取組であるが、組織的な取組など、今後の発展に期待したい。
2	本プログラムは大学と短大が連携して、全学必修の初年次教育科目として実施されている。協働力やロジカルコミュニケーションの育成などを、学生同士の学び合いを通じて実践している。ただ、具体的なコンテンツの明示がないことが惜まれる。また、反転授業、コメント返し、eポートフォリオなどの実施が「時間外学修時間の実質化」に大きく寄与している点はおおいに評価できる。ただ、この点についてもエビデンスの提示があれば説得力が増したと思われる。
3	類似の取り組みは他の大学も多いと思われるが、大学のビジョンに基づき全学必修科目とされている点は大いに評価できる。多面的かつ論理的な思考力を養成する科目であり、「思考技術基礎」との連携という点で、より「読む」と「書く」との連携による思考の深化が図られるような授業内容の開発も期待したい。
4	本取組は医療分野において現代的ニーズとされるチーム医療をカリキュラムに落とし込んだ教育実践である。初年次と高次年カリキュラムとの連続性、複数学部における全学展開の初年次教育、PBLとアカデミックリテラシーとの組み合わせた総合的な初年次教育プログラムなど、参考になる知見が多くみられ、今後の発展に期待したい。

4つの取組については、学会ホームページのマイページからご覧いただけますので、見逃している方は、ぜひ視聴してください。

ところで、2021年度の実践賞については、コロナ禍の影響もあり、オンライン投票にせざるを得ませんでした。学会ホームページにアクセスしてご覧頂いた会員が少なかったようです。次回大会は対面を想定しておりますが、今後の状況によっては、オンライン開催も想定されます。

次回の実践賞については、今回の反省を踏まえ、できるだけ多くの会員に投票いただけるよう検討いたします。

また、今回の実践賞に関する今後のスケジュールは、次のようになっています。

2022年9月 第15回大会にて表彰状を授与

2023年3月 初年次教育学会誌に審査結果報告書を掲載

以上、審査結果の報告です。引き続き会員のみなさまには、倍旧のご厚情を賜りたく、切にお願い申し上げます。

8. 編集担当より

総務広報委員会委員長 笹金 光徳（高千穂大学）

(1) 賛助会員による広告添付について

賛助会員には、年1回、会員への情報提供の際に、A4で1ページ分の広告・情報提供資料の添付が認められております。本学会ニュースレターでは第4号より、それまでのメール添付ではなく、学会ウェブに本文（このファイル）および広告データを次号刊行まで掲載します。

なお、学会および学会事務局は、これらの広告内容に関与していません。

<http://www.jafve.org/newsletter14/>

(2) 実践事例の募集について

ニュースレターに掲載すべき実践事例や事例紹介などを募集しております。掲載ご希望の方は学会事務局にお知らせください。

(3) 事務局分室について

本学会では国際文献社に事務局業務の委託を行っております。問い合わせ等につきましては以下をご確認ください。

事務局分室

〒162-0801

東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

TEL: 03(6824)9372 FAX: 03(5227)8631

E-mail: jafve-office@bunken.co.jp

事務局 明星大学 菊地 滋夫研究室内

編集：笹金 光徳（総務広報委員会）

（2022年3月31日第1版公表）